
雪模様

灯夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

雪模様

【Nコード】

N1617D

【作者名】

灯夜

【あらすじ】

真冬の空気、下校までの僅かな時間、図書室にいるのは、いつものひねくれた図書委員。いつもより少しだけ近い距離になれるタイミング、その切っ掛けは些細なモノでも、確実に踏み出した一歩が、二人の距離を縮めていく。

冴える空気は嫌いじゃない。

人気の無い学校の独特の空気も、今時珍しい木造校舎も、上履きと廊下の木目が奏でる柔らかく吸い込まれるような足音も。

そして、見るだけなら、窓の外のじつとりと湿った、大粒の雪も。大きな窓の外、黒い空に覆われた薄暗いグラウンドは7割方雪景色で、もうしばらくすれば銀世界が完成するだろう。校舎を満たす冷たい空気の中にも、どこか水気が混じり始めていた。

壁に貼られた、昔の校内新聞だとか、ニュースの切れ端、部活のポスターなんかを横目で流して、ひっそりとした教室を通り過ぎる。目的地は二階廊下の突き当たり、扉の小窓からうつすらと光が漏れている。

そこに居るのは分かっているけれど、こうしてその存在証明みたいなものがあると、やっぱりどこかホツとする。

図書室と書かれた掛札と、ガタガタ煩い引き戸。

「……暖房くらい入れてるよ」

室内でも外の雪の中にいるような室温に、白い息で抗議した。

「貴方が来るんじゃないかと思って」

ドア横の貸し出しカウンターに座った一人ぼっちの図書委員は、ちらりとこちらを一目見てからつまらなそうに言い放ち、表情を全く変えずに眼鏡を掛け直して、視線を両手の本に落とした。

「カミカゼ式の嫌がらせか？」

スチームストーブの前に行き、パネルを弄りながら、からかう様に問いかけた。

下校時刻には少しだけなら余裕はある、ボイラー室の火はまだ落ちていないはず。だからこうして、スイッチを入れれば……うん、まだぬるいけど、なんとか温風が吹き出してくる。

「神風？」

小首を傾げた明海。その前髪がとても滑らかに揺れ、白い言葉は彼女の肌の抜けるような白と重なって、儂く、どこか痛々しくも見え、自分の責任では無くても、申し訳無い様な、苦い気持ちが込み上げてくる。

「自爆してんじゃん」

射抜く様に見つめる彼女の視線が外せなくて、その上、からかえる様な気持ちでも無くなっていて、曖昧な表情のまま、予定通りに台本を読む様に話した。

「寒いのは、好きだもの」

その変化に気付いているのか、いないのか、明美の声はいつもと同じでそっけない。だから「気が合うな」と、嫌味っぽく返し、手近な本棚から一冊を取り、貸し出しカウンターから、少し離れた机の椅子に座った。

間にはちょうど一つの机、四つ並んだ読書机の彼女寄りの二番目、多分、二人の距離もこの位なんじゃないかと思う。

「……………そうね」

と、答えた明海。視線はもう上げて来なかったけど、呆れているのが声の調子から伝わってきて、やっぱり、ちよつとムツとした。

まったく、何でコイツと会話しているのかが、未だに分からない。もっとも、向こうにとっても、それは同じかもしれないが。

彼女にしてみれば、運動部でしかも、粗野に見えるらしい俺が、ハードカバーを読む事は、天地が引つ繰り返る様な出来事だとほざいていたし。俺にとっては、普通にシカとすれば良い所を、敢えて絡んで来る理由が分からない。秘かに慕われている？ いや、そんな事は無い！ 声の温度や、態度、そんなサインは一つも出されていなかった、始めから、そして今も。

それはそれで失礼じゃないか？

容姿とかも自信があるわけじゃないけど普通程度は良いと思うし、成績だって悪くない、運動関連なら、陸上で鍛えているのでばっちり。俺が鈍いというオチは無いと思うけどなあ……………って、こんな事

を考えていると、俺がコイツを好きみたいじゃないか、と、そこまで進んでいった思考を慌てて緊急停止させる。

タイプじゃない、タイプじゃない、タイプじゃない！

俺が好きなのは、もっときちんとしてくれる可愛い子で……って、だから、少し恋愛の考えから外そう。

「そういえば、一昨日、俺が前々から要請出してた本、かつぱらっただろ」

唐突だったかもしれないけれど、別の思考を探していて見つけてしまったので、そう話しかけた。

「せめて上品に、浚うと言ってくれないかしら」

ページの文字を目で追いながら、口ではそう答える明海。

案外、器用なヤツだ。

「一緒じゃん」

馬鹿にした様に、俺がそう呟くと、明海は、分かっているいなあ、という風に溜息を吐いて、二つの大きな違いというヤツを、極めて些細な実例と言葉の意味で説明し出した。

耳に丁度良い彼女の声を聞きながら、そんないつもの事を今日も繰り返して、それでいて距離を縮めたり親密になる事無く、約二年間もこんな事を続けているんだな、と、改めて人事みたいに感心してしまう。

そして、その講釈を話し終えて、最後に念を押す明美に「分かった、分かった」と頷いてから、やっと本に意識を落とした。

自分以外のあと一人の存在が、この空間を静かにさせ過ぎないから、ちょうど心地良い。

下校チャイムまでの三十分という、長くも短くも無い時間は、窓の外の雪のように、穏やかに降り積もっていった。

間延びした声の下校放送は、人気の無い校舎に響き、その中に吸い込まれる様に消えていく。

いつもは、閉館作業をする彼女を置いて、先に帰っていたのだけど、今日に限って俺と同時に図書室から出て、鍵を閉めている明海放って置いて帰るのはどこか感じ悪かったので、施錠を確認するのを待って、こつちを振り向くのを見てから、背を向け歩き出した。気まずくはないけど、何を話せば良いかも分からなかった。特に言葉も無く、下駄箱まで、間に横たわる五歩分の距離を変えずに二人歩いて、それぞれのクラスの下駄箱の場所へと別れた。

「何だよ？」

靴を履き替えて、顔を上げた時、少しだけ意外な見つめてくる視線に、少しつつけんどんに問いかける。

いつもなら図書室で別れていた彼女、ここまではそんな日もある、で良かったけれど、ここで待っているのは、なんとなく廊下を歩く雰囲気から予測出来ても、理由がないとしっくりこない。

そう、先に靴を履き替えた明海は、ドアの前でこつちを見て待っていた。

「傘、持っていないもの。まだ降り続けているのは、予想外カナ」

悪びれもせずに、明海はからの両手をヒラヒラと振って、そう言った。

直接的な言葉じゃなくて、それでも、して欲しい事をきちんと伝えてくるあたり、かなりしたたかな性格だと思う。

そしてその後ろ、ガラス張りのドアの向こうには、深々と降り積もる雪が、暗く染められた景色を、ぼんやりと照らしていた。

俺に頼み事をするというのは意外だけど、状況を思うに、やっぱり仕方がないので、広げた傘を傾けて右半分のスペースを空ける。

「違うよ」

「どこが？」

そう聞くより早く、彼女の細くしなやかな指が、一瞬、俺の指を絡め取って、その内にあつた傘の柄だけをさらっていった。戸惑う俺をそのままに、真白な雪原に三歩、トン、トン、トン、と、軽や

かに足跡を刻んで、逃げていく。

触れた指先が熱を伝え、離れていく背中が少し胸を苦しくさせた。
「どうかした？」

分かっているのに敢えて挑発するように、含み笑いで振り返る明海。眼鏡の奥、一重瞼が嫌味つたらしい。

重く湿った雪の感触が、髪を嫌な感じに濡らしていく。

「良い度胸だな……このバカ！」

踏み込む一步、飛び退いた彼女、伸ばした指先、翻る彼女の長い髪、吸い込むと痛いほど冷え込んだ空気に、彼女の白い息、いつもより幼く聞こえる笑い声、少しだけ上がった体温、自然と近づいていた二人の距離。

空は、まだ雪模様。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

仲良くなるタイミングって、何時訪れるのか、分からないモノだと、常々思っ居たりします。

そのくせ、その時には、今だ、というはっきりした自覚のようなものが生まれますし。

今回、描写にこっぴどみようと、意識的に背景描写を増やしてみました。

今後の参考にさせて頂きまますので、宜しければ、ご意見・ご感想・ご指摘等、よろしくお願い致します。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617d/>

雪模様

2008年11月7日07時03分発行